

学生の皆さんへ

Online 授業とグローバル化



建築学部長
岡崎 甚幸

コロナ感染、online 授業。建築学部の教育は、開設と同時に未知の新たな環境に突入した。ますます大容量化する動画による online 授業は、建築学部でも教育研究のグローバル化を確実に促進する。

6月8日、大学院生15人の設計実務演習の作品の講評会にトルコ・イスタンブールのバフチェシヒル大学の教員2人がonlineで参加した。6時間の時差のため、午後3時から学生一人ひとりの作品の発表と講評が両国の教員によって行われた。6月20日には、トルコからの留学生2人の博士論文公聴会に同大学の教員がonlineで参加した。また、例年6月から8月まで同大学の学生10人が本学に滞在し、2～4年生の各設計演習に分散参加している。この交流も今年はonlineで実施する。

かつて、ケネディ米国大統領の提案で同国の数校に大学院都市デザインコースが開設された。私はその最初の年に母校からの推薦で入学した。ヨーロッパ4か国とアメリカの5人の同級生とはコロナ禍や大統領選挙の情報を交換。今も大切な友人だ。また近年、アフガニスタン、ウズベキスタン、パレスチナ、ヨルダンなどの文化遺産の保存とそのため博物館設計に参加している。国際関係の難しさはある。しかし、各国で頑張っている多くの日本人や、日本を深く理解する現地の人々に出会うことができる。

わが国建設業界をリードする企業への就職は、大学院修了予定者の競争の場だ。その中の建築設計の分野では学歴ではなく、学力が問われる。書類選考等を突破した大学院生が即日設計で競う。まる一日、各会社に缶詰になって小型の建築物を設計する。近年、本学大学院建築学専攻の多くの学生がこの難関を突破し、活躍している。

これらの企業の設計担当者には毎月数社ずつ、各学年の設計演習の講評会に参加してもらっている。今年はこれもonlineで行う。学部から大学院まで、学生はほぼ毎月一つの設計課題をこなしながら作品を蓄積。これらの学生たちの提案は、学外の講評者にも刺激になっている。